

今回私がこの研修に参加させていただいたのは、以前から夢のある国際協力の仕事に関心があったことと、単純にテレビでしか見たことのないアフリカの地を実際に訪れてそこに住む人々の気質や文化を自分で感じてみたいという思いからでした。日程の都合上私は一人でケニアに行くことになり、不安を抱えての出発でしたが、今振り返ってみてもこれほどの貴重な経験はありません。本当に行って良かったです。以下研修内容の報告をさせていただきます。

エルドレットにある「道普請人」のCOREオフィスに到着した翌日は、まだ着いたばかりだからということでエルドレット市内やホームステイ先とは別の村に連れて行ってもらいました。路上に立ち並ぶマーケット、これでもかと言わんばかりに人を詰め込んで走るマツター（バス）、真っ平らでどこまでも見渡せる壮大な大地、、見るもの全てが新鮮で、ついにアフリカに来たんだと実感しました。

そしてその翌日からいよいよ村でのホームステイが始まりました。初日は日曜日だったのでホームステイ先に着いてすぐ教会に行ったのですが、そこで教会の主人が説教をしながら神の力が宿ったというハンカチを人々に投げつけ、ハンカチが当たった人が泣き叫んだり、気絶して椅子ごと転倒したりする光景を目の当たりにしました。初日から日本との宗教観の違いに圧倒されました。2日目はfish pondを掘る事業に参加しました。想像以上の力仕事でしたが、鍬の使い方が下手な私に色んな人が温かく指導してくれたり、愉快地話しかけてくれたりしたおかげで、全く苦痛を感じず楽しく作業ができました。その後は知り合った人の家々を訪ね、英語に通訳してもらいながらなんとか会話していました。基本的にホームステイ先のご主人と村のリーダー的存在の女性との3人で行動していましたが、彼らは他にも村の病院、農家、World Peace Dayの祝典など様々なところに私を連れて行ってくれました。家に帰ると妊娠中の奥さん(なんと臨月！)がごちそうを作ってくれていました。夜は日本とケニアでの生活について色んな話をしました。本当に楽しく満たされた日々でした。こうしてホームステイを通して村の人々と話す中で最も印象的だったのは、皆しっかりと夢を持って生きているということでした。そこからは人としての誇りや型にはまらない自由さを感じられました。最もシンプルで本質的な人間の幸せを見たような気がします。さらにもうひとつ感じたことは、私がホームステイをした村では2008年の大統領選がきっかけで起きた悲慘な暴動の被害を強く受けたこともあるかも知れませんが、平和構築への意識が全体的に高く、人とのつながりが非常に大切にされているということです。しかもそのつながりは血縁関係、年齢、民族、人種をも超え、かつ持続的に存在しているところが素晴らしいと思いました。色んな家を訪問しましたがどこの家も笑顔で明るく迎え、親切にチャイやご飯をふるまってくれました。人を喜ばせることで喜びを得るという文化が当たり前に浸透していると感じました。また、私に関しても日本の貿易や宗教について尋ねられてうまく答えられず、自分が今まで日本についてグローバルな見方をしてこなかったことや英語力不足であることに気づきました。普段とは違うことを考え、感じる事ができたという意味でもホームステイは大変貴重な体験でした。

ホームステイを終えた翌日、ケニアのモイ大学とアメリカのインディアナ大学が提携して行っている AMPATH(Accademic Model Providing Access To Health care)というプロジェクトを見学させていただける機会がありました。私は医学的知識がないどころか日本の病院のシステムすらよく知らない状態でシステムを十分に理解できるのか不安でしたが、マムリン教授のアイデアの素晴らしさは医学という枠組みを大きく超えたところにありました。エイズ患者がきちんと回復できるよう栄養となる野菜の農園が作られているだけではなく、回復後に野菜を育てて生計を立てられるような社会復帰システムまで整えてあるのだそうです。患者を社会と切り離して医学的な観点でしか捉えないのではなく、患者の背景まで看るのが正しく行き届いた医療なのだと感じました。喜田さん、通訳ありがとうございました。

翌日は名残惜しく思いながらもエルドレットを発ち、ナイロビにあるマトマイニという孤児院を訪問しました。到着後は、翌日に日本人ふれあい祭りがあるということで、出展するストラップ作りを手伝わせていただきました。このストラップ作りはスラムのママたちの職業訓練として行われているということでした。翌日のふれあい祭りでは他にも様々な作品が出展され、売り上げは5万シルを超えるなど素晴らしい功績でした。翌日は偶然同時期にマトマイニを訪問された方に同行して難民キャンプを訪れました。2008年の暴動後に主にエルドレットから逃れてきた人々が住んでいるのですが、何も無いところから1年程でできたとは思えないほどまとまった1つの村が形成されていました。私は菊本さんの娘さんが村の人と話しているのを聞いているだけでしたが、当面の問題について見事な分析がなされていることに驚きました。悲観的な姿勢は見られず、改善しようとする強い意志が伝わってきました。また別の日にはスラムを訪れました。私はスラムというと無秩序なイメージを持っていたのですが、実際にスラムを歩いて人々が懸命に働く姿を目の当たりにして、イメージと全然違うと思いました。確かにゴミの山や密集するトタン屋根などの静止画はイメージ通りでしたが、スラム全体が生きている、なんて実際に訪れることなくしては感じられなかったと思います。また、マトマイニでは毎日外出していたために夜しか子供たちと触れ合う機会がなかったのですが、それでも皆積極的に話しかけてくれてとても楽しかったです。木村教授もおっしゃっていましたが、問題を解決するのはあくまでそこに生きる人自身なのだから、当人たちから改善策の提案が出ることが国際協力のスタートなのだ、という菊本さんの主張が印象的でした。マトマイニの人々を見ていて感じられる信頼関係もそんな菊本さんの活動から十分に納得できるような気がします。

この2週間は間違いなく私の今までの人生の中で濃厚で貴重な時間でした。本当に1年くらいケニアにいたような気がします。この研修で関わった人々は数知れず、自分の世界が広がっていくことを実感する日々でした。せっかくできたつながりは思い出にしておかず、これからも生かしていくつもりです。最後になりましたが、こんな貴重な機会を与えてくださった木村教授をはじめ、今回の研修を支えてくださった全ての方々に感謝して報告を終えたいと思います。ありがとうございました。